終わりの終わりと終わりを

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりの終わりと終わりを

【Ｎコード】
Ｎ１８８８Ｇ

【作者名】
一二三四

【あらすじ】
『世界の終わりを題材にした小説を書いてください』

『世界の終わりを題材にした小説を書いてください』

＊

例えばとなりのトトロに出てくる木の洞を想像して貰ったら分かりやすいだろうか。地図にも載っていないし大人にも入れない、そんな場所がある。

かれこれ四時間ぐらいだろうか。私は夕日が傾く坂を何度も何度も上り続けていた。

迷子になった吉村桔梗君を捜してこんな辺鄙な場所まで出向いているわけだが、どうしても世界の裏側に入ることが出来ない。坂を上り詰めると普通に公団地の前に出てしまい、桔梗君が消えた世界の裏側にどうしても入れないのだ。だから忌々しくも私はとなりのトトロなんかを思い出しているわけだ。何度も何度も。

夕日をバックに影を落とす公団地を見つめ、溜息を吐いて坂を下りる。この坂がまたとてつもなく長く、誰が広めたのかは知らないが近所の人からは心臓破りの坂などとありきたりな名前が付いている。主に上りについてそう呼称されるのだが、ちょっと考えてみると下り坂の方が重力のせいもあって負荷が掛かると思う……。

ともかく数分掛けて私は坂の下まで降りてきた。振り返ると視線の遙か先に消失点を作って坂が終っている。そして、もっと目を凝らすと、消失点近くに立ち上る陽炎のような物が見える。どこから世界の裏側へ行けるのか分かっているだけになおのこと質が悪い。竿の先にニンジンを括り付けられて、それに向かって走っている馬の気分がよく分かる。騙し絵じゃないんだから、もっと素直に近づければいい物を。

何度目かのスタートを切ろうと一歩足を出すと、カッターシャツの裾を誰かに引っ張られた。振り返っても誰もいない。おかしいな、と思っていると、再び裾が引っ張られる。視線を下に落とすと何者が服を引っ張っていた。

落ちくぼんだ瞳の向こうに広がる悠久を見るには時間が無く、私は前を向く。自分でも酷だと思いながら前身。しかし裾を引っ張る力は消えず、何者は私と共に歩んでいく。

消失点が段々と広がっていく。水平に線は延びて遠くから確認できた陽炎はいよいよ大きくうねる。九十九度目にして恐らく成功するはずだろう侵入。小さな確信は進む毎に広がっていった。

知らず知らず駆け足になり、陽炎の中へ。皮膚がちりちりと灼ける感覚が足下から這い上がってくるが、それすらも心地よい。ただ、世界の裏側に入るという行為が完結するだろう充足感が全身を満たしていく。

坂の上。

本来なら公団地が逆光を浴びて建っている場所に、しかしそこにやはり公団地は建っていた。眼前に広がる色とりどりの花と草に囲まれて。どこか遠く人の手が入っていない高原の草原の様な荘厳な光景。朝霧に濾過された優しい光が全てを包み込んでいる。惜しむらくは写真に収めたとしても無駄であるということ。あまりの歯がゆさに本来の目的を忘れそうになる。何者はまだ裾を握っている。

ポケットの中から奇跡を取り出して草原に投げる。転がってからきっちり三秒経った後、奇跡を中心に霧を払いながら夜が広がっていく。夜は草原の先にある公団地を通り過ぎて何百メートルか先で止まる。世界の裏側が意外に広いことに私の中の一部は焦燥に駆られる。分割した意識の最底辺に沈み込んだ写真から吉村桔梗君の顔をもう一度引っ張り出して、もう一度依頼内容を確認する。少しだけ生まれる安心。

ほっとしたのもつかの間のことで、草原の花は菊や百合、女郎花、それに桔梗といった弔花の類に変貌を遂げていた。公団地も醜く変

形して三階から屋上部分までが捻れて、まるで倒れかけた塔のように不安定な状態で静止している。風を切ると言う表現からはかけ離れ、叩きつぶすと言った表現の方が正しい不穏な音も遠くから聞こえる。

私は草原に一歩足を踏み入れる。茂みは深く歩く毎に膝まで沈み込んでいく。

公団地と世界の裏側のちょうど真ん中ぐらいにだけ、球形に切り取られた何もない空間が現れた。本当に何もない。宇宙の外側を覗き込むような、そんな深淵から目をそらすために色眼鏡をかける。これで何もない空間はノー・イメージと表示される。精神衛生上よろしくない物にわざわざ触れに行く必要は無い。

何もない球形の空間を迂回して公団地に向かう。あれだけ捻れているのだから、吉村桔梗君はあそこにいるに違いない、と私の中の大多数は答える。しかしごく少数ではあるが、罠だと答える部分も。

私の一歩が公団地の捻れを増加させることから、九割方吉村桔梗君がそこにいるのだと確信する。プロテクトは物語に必至アイテムである。

入り口に無事到着すると同時に空から鼓膜を震動させない声が降ってくる。

「p－　odep－kfovvpi　kbpi　v　upi　kuipi　l　pi　lep　vtvup　ioiapi　lapi　kevpi　v　upi　ltpi　ktvpi　v　api　ketpi　kokpi　l　p　iekipi　ktkpi　k　tepi　lap　itlpi　ketpi　ltpi　ktvpi　v　api　ketpi　lvpi　l　pi　lap　fkfap　ikiepiaauep　vitfp　a　tap　itlpkieu　pi　ltp　oviipi　lep　aeevpvvuipi　kuepi　lfpi　keopi　v　upi　l　p－kf　ftpi　ketpi　kuipi　l　pi　lapt　ikpt　ik」

＊

『出来るなら人を探すお話がいいでしょう』

＊

鯨が、しかも白鯨が空を舞っている。今まで出逢ったことはないが、確信が心の中に芽生える。

公団地の上空を周回する白鯨はなおも低い声で呟きとも嘆きともつかぬ声を発しながら、外殻のスキュラ管球から“　”の照射を行う。世界の裏側の端まで到達した“　”は、ぼとりぼとりと落ちて『朽ちるに任せる』を作り出していく。草原が『朽ちるに任せる』に飲み込まれて優しい夜の帳に孔が開く。

時間は少ない。予期せぬ捻れと白鯨の出現が恐るべき早さで世界の裏側を書き換え始めている。迷っている時間があれば急ぐ方が得策だろう。何者はなおも裾を握ったままだ。

階段がざっと見ただけで二十数個あるが、それら全てをスルーしてエレベーターを探す。捻れに飲み込まれて外側に大きく反り返ったドアを目の端で確認すると、『開？』ボタンを連打して早く開くよう促す。

遅々として開かないエレベーターのドアにしびれを切らせて、帰りに使う予定であった奇跡を投げる。ドアは一瞬にして透明の薄い膜に変わり、薄い膜は瞬時にして弾けた。乗り込むと本来鏡が付いているであろう場所にはぽっかりと孔が開いており、その先には螺旋階段が見える。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

鉄製のステップは軽快に音を奏でる。それさえも一瞬にして拡散して消えると見せかけては収束して大音響を発する。カオスの中に

投げ込まれた石は砕ける運命にあるのかそれ以外なのか。
上り疲れてくると、それを励ますかのようにぎゅっと服の裾に力が入る。いい加減離れないのかと私は思うが、依然として何者はピッタリと寄り添うようにくっついている。まだなのか、吉村桔梗君の居場所は。ここまで来て実は居ませんでした、なんてオチは洒落にならない。なおもステップをぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。
ミキサーにかけられた果物寸前まで回った私の目の前に光が見えた。その光は穴の中、いや、客観的に見て外から漏れてきている。
奇跡を使って開けた孔よりも若干小さい孔がエレベーターの壁に穿たれ、今度は入ったときと逆の手順を踏んでエレベーター室の中へ。相変わらず閉まっている無愛想なドアに蹴りを入れて破る。水分をたっぷり含んだ粘土みたいにドアが変形して吹き飛ぶ。
外観からの捻れからは想像できないほど最上階は普通だった。病的なまでに歪曲を嫌った直線的な佇まいは新築のそれだし、壁に等間隔で並ぶドアの向こうからは笑い声と共に味噌汁の匂いが漂ってくる。平均的な日本人の家庭が存在していた。
しかし私は奇妙な一点を発見する。ドアにノブはなく、ドアだと思っていたのは壁に描かれた精緻な絵だったのだ。笑い声は絵の中から聞こえてくる。
埋め込み式の電灯が一斉に消え、一基ずつ付いては非常階段へ誘導するように点滅していく。従うべきか一瞬だけの会議を開き、従うことに決定。どのみち逃げ帰る手はない。
「piaaotp ikiep vitfpi ltp klop
av fpi ltp ie ipi kuipi ketpi
lep fkfapi vkvp-kfk epi v upi
kokpi lap iep iepi ltp-k utp
khfipi ktvpi kovpi ktipi v tpi
lepi lap vi fpi lep fiaep fuo
upi kovp fitvpi koepi vivpi l

pı ketp a tapı ktvpı l pkfoakp
ı v t」
白鯨の声とスキュラ管球から照射される“ ”の音。
見た目はコンクリートのそれと同じだが材質は明らかにソマートイの階段を上って封印が為されている非常扉の前に立つ。
奇跡は後一個しか残っていないので、背中から生える疑似スキュラ管球を引っ張り出す。ジャックを挿入できるプラントが無いため制御は困難だが、何も正確無比な命中を求めているわけではない。疑似“ ”を放つと一歩下がって階段の下に身を隠した。封印はどろどろと『疑似朽ちるに任せる』へと変貌して薄気味悪い鮮やかな青色の八兆石になる。
八兆石を踏み砕いて屋上に出ると、パラドックスの小箱がちょこんとお情け程度に置いてあった。結局肩透かしを食らっただけで、吉村桔梗君はいなかった。となれば草原かさもなくば白鯨の中か外か中間かにいるのだろう。
「p ti pı vkvp fvo p vvtapı ku epı lvpı kukpı keo」
「pı kuepı ktkpı v ep-kfk epı k cpı kokpı v upı ltpı kokp- e」
「p kveep-kfovvpı kbpı v upı ku ipı l pı lep vtvup ioiapı vkvp -kfk epı keopı ktvpı kbpı ltpı lap vtetpı kokpı lvpı kuipı l pı lipı lapı lvpı keo」
結局答えは聞けなかった。パラドックスの小箱を拾ってから屋上の端にある極端に背の低い安全柵の手前へ行く。最後の奇跡を草原の中心に投げると同時に夜は雲散霧消。ついでみたいな感じに八兆石や残りの“ ”も消える。裾を握る力がいつの間にか無くなっていることに気づいたのもちょうどここでだ。
見晴らしの良い公団地の屋上から世界の裏側を堪能する。正常す

ぎるまでに規定された空気が澄み渡った空間は恐ろしいまでに綺麗だ。こんな世界にはとてても人間なんて住めないだろう。住むためには鯨や何者みたいにもっと純粋にならなければいけないのだ。そして、きっと吉村桔梗君は純粋さに憧れて本当の純粋になってしまったのだろうと思う。それは私の身勝手な空想だったけれど、この場所ではとても似合っているように見えた。

屋上から身を投げる。

疑似スキュラ管球に受ける風圧はほどよいぐらいの摩擦熱を持って私を迎える。そして、柔らかすぎて嫌になるぐらいの草原が両手を広げて待っていた。

半ば埋まるようにして草原に着地した私は色眼鏡を外して球形の空間を見据える。何も見えないすら見えない空間はしかし現実にそこにある。その意味するところは分からないが、タイムプールが副次的に出来上がることは既に知っている。

パラドックスの小箱を開けて、中身を球形の空間に放る。球形の空間に真っ直ぐと蜂鳥は飛んでいく。

白鯨が一度空気を振動させる鳴き声を上げて、それによって私は裏側の世界からはじき飛ばされた。

表側の世界には夜の帳が全てを包み込んでいた。そういえば私は何を探していたのだろう。純粋な空間は世界各地で発生して、徐々に増えて行っているということ以外、今は考えたくなかった。

（後書き）

白鯨と私が喋っている言葉は宇宙語です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1888g/

終わりの終わりと終わりを

2010年10月8日14時41分発行